

ベネッセ教育総合研究所

アセスメントを活用した 学生の成長支援の 有効な方法を探る

山口県にある専門学校 YIC リハビリテーション大学校では、効果的に教育の質を高めていくためには、まず新入生の現状をしっかりと把握することが大切だという考えの下、(株)進研アドが提供する専門学校向けのアセスメント「基礎力リサーチ」*を実施し、学生の実態を把握しています。今回は、5月と12月に調査を行い、その2回の結果を比較して、特に学習意欲や職業意識に変化が見られた学生8人を対象に、聞き取り調査を行いました。学生個々の成長に迫ることで明らかになった学生の実態は、どのように教育の質向上に活かせるのか。「基礎力リサーチ」と聞き取り調査の2つの結果を見ながら、同校の3人の講師に語り合っていました。

専門学校 YIC リハビリテーション大学校

山口県に専門学校7校、京都府に専門学校3校と日本語学院1校を擁する YIC 専門学校グループの1つ。2003年に山口医療福祉専門学校として開校後、2009年に現学校名に変更。理学療法士・作業療法士の国家資格取得を目指した専門教育を行う。卒業生は、県内外の病院、リハビリテーション施設、福祉施設などで活躍している。

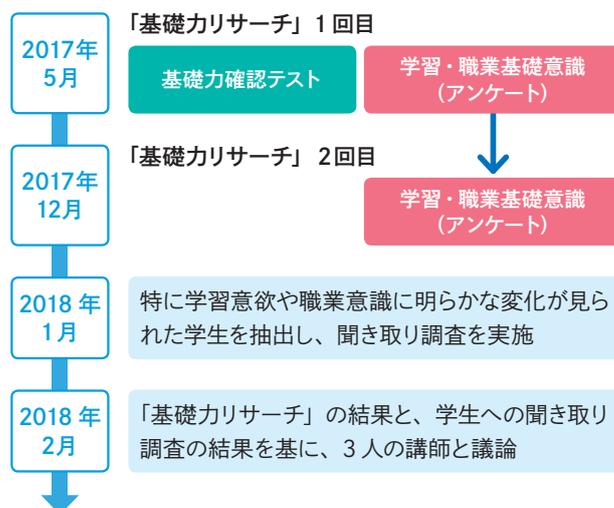
設立 2003 (平成 15) 年 形態 理学療法学科、作業療法学科 (ともに4年制)

住所 〒759-0208 山口県宇部市西宇部南 4-11-1 電話 0836-45-1000 Web <http://www.yic.ac.jp/rh/>

調査概要

【調査の流れ】

- 2017年5月と12月に、YIC リハビリテーション大学校の理学療法学科・作業療法学科の1年生(計41人)を対象に(株)進研アドが提供するアセスメント「基礎力リサーチ」を実施。
- 5月と12月の結果を比較して、学習意欲や職業意識に明らかな変化が見られた学生8人を抽出し、個別に聞き取り調査を実施(2018年1月)。質問項目は、①入学理由、入学前後のイメージの変化、②1年間で学んだこと(授業、先生とのかかわり等)、③希望する職業への接近、④学生生活や人間関係、⑤今後の学生生活に向けた展望に関する5項目。さらに、専門学校への進学を決めてから現時点までの意欲の変化を表す「意欲曲線」を書いてもらった。
- ②の聞き取り調査で、学生から授業について特に評価が高かった3人の専任講師に、①②を通して明らかになった学生の学びや成長の実態を基に、学校として、今後どのように教育・指導改善を行っていくべきかを議論してもらった。



* 「基礎力リサーチ」

主に新入生を対象に、学生一人ひとりの入学時の学力や職業準備意識の把握、並びに入学者全体の傾向把握を目的とした、専門学校向けのアセスメント。「基礎力確認テスト」と「学習・職業基礎意識(アンケート)」から成る。受検者個別の帳票と復習用教材、受検者全体の集計結果・分析が送付される。面談などの個別の指導資料として活用できるほか、結果分析によって、指導改善にも活用できる。詳細は、<http://shinken-ad.co.jp/service/solution4-2.html>

座談会

調査結果を、指導改善の効果検証や 指導改善の方向性の共有に活用したい

学生に感じている課題

学生をいかに大人にして 社会に送り出すか

——今回の調査は1年生を対象に行いましたが、先生方が日々授業をされる中で、1年生に対して課題に感じていることはありますか。

川崎 私は、1年生が履修する2科目を担当しています。本校に2017年8月に赴任してからまだ半年ですが、本校の学生は非常に素直だと感じています。ただ裏を返せば、まだまだ子どもで、4年後に病院などで働くことを考えると、講師がいかにかわり、学生を大人にして社会に送り出すかが重要だと考えています。

石丸 「先生、先生」と慕ってくれるのはうれしいのですが、友人と同じように接してきて、礼儀や言葉遣いなどの面で課題が見られる学生が目立ちます。理学療法士や作業療法士は、患者様の身体的な回復だけでなく、精神的な回復も支援していくのが仕事です。子どもから高齢者まで幅広い年代の人と向き合い、心のケアもしていくために、どのような年代の患者様が相手でも、礼儀正しく振る舞えるようになってほしいと考えています。

松原 私が7年間指導してきて思うのは、素直な学生ほど私たちの指導がずっと入っていき、入学時の成績にかかわらず、どんどん知識や技能を吸収して伸びていくということです。そう

した学生のよい面を活かしながら、大人として、職業人として自立させることを目指し、日々指導しています。

——高校卒業直後の1年生の中には、「生徒」意識が抜けない学生もいるのでしょうか。それらの課題に対して先生方はどのように対応されていますか。

松原 本校の講師は全員、理学療法士や作業療法士の資格を持ち、病院や福祉施設などの臨床現場で治療にあたっていました。そうした経験から学生に対して、「先生として教える」というよりも、「自分と一緒に働く新人を育てる」という意識が強くなります。医療人としての倫理観や職務上のルールなど、新人であっても許されないことは、学生にも厳しく指導しています。例えば、提出物の期限は厳守させています。仕事で書類を提出し忘れては、患者様や病院などに迷惑がかかり、時には経営にかかわる問題に発展します。学生には期限を守る職務上の重要性を繰り返し説明し、守るのがあたり前なのだという意識を持たせるようにしています。

石丸 もちろん、1年生は職務内容をほとんど知らないのですが、その重要性を理解できない部分もあるでしょう。在学中の4年間で、学習の内容に応じながら段階的に伝えていきたいと思っています。

川崎 私は学生時代にしっかり学んだつもりでいましたが、臨床で仕事をするようになってから、まだまだ知識不足なのだと気づき、苦勞しました。その経験を学生の反面教師にしてほしいと考え、自分の失敗談をあえて話し、そうならないためにはどうすればよいかを伝えています。

座談会にご参加いただいた講師の方々



川崎裕史先生

かわさき・ひろふみ 理学療法士。同校に勤務して1年目。同校の卒業生。担当科目は、「理学療法評価学」「日常生活活動」など。

松原早苗先生

まつばら・さなえ 理学療法士。同校に勤務して7年目。担当科目は、「解剖学（運動器）」「運動学」「生活環境論」「地域リハビリテーション論」。

石丸拓也先生

いしまる・たくや 作業療法士。同校に勤務して2年目。松原先生と「解剖学（運動器）」を担当。ほかに、「生活機能治療学」「生活環境論」を受け持つ。

支援体制の課題

定期的な学科会で
学生の情報を共有

——先生方が実践者として現場を知っている強みが、よりよい指導に活かしているのですね。

川崎 私が現場経験で感じたのは、理学療法士や作業療法士には感受性が最も大切だということです。身体的な現象だけでなく、患者様が本当に困っていることは何か、その問題についてどのような背景があるのかといったことまで把握しなければ、効果的な治療はできません。相手の立場で考えることが、とても重要なのです。ところが、学生は自分のことで手いっぱい、相手のことにまでなかなか意識が及びません。普段からそうした状況を逃さずに、「こういったとらえ方もあるよね」「相手はどう思っているかな」というように声をかけ、視野を広げられるようにしています。

——そうした指導には学生個々の課題の把握が鍵となりますが、学校として対応していることはありますか。

松原 基本的に、授業などで学生の様子を観察し、気になったことは職員室などで話したり、学科長に相談をしたりしています。また、週1回行う学科会議でも、学生から受けた相談や休学・中退につながりそうな課題など、学生個々の状況を共有しています。

石丸 本校は、ゼミ制度を導入し、定期試験後や進級時などに個別に面談を行い、学生一人ひとりの学習状況や課題を把握するようにしています。

学習指導上の課題

講師個々の授業改善を
学校全体にどう広めるか

——学習指導に関する課題はいかがでしょう。松原先生と石丸先生は2人でチーム・ティーチングをされているそうですが、どのように授業づくりをされ

理学療法士の仕事には感受性が最も大切で、自分本位にならず、相手意識を持てるよう指導しています。



ていますか。

松原 2人で受け持っているのは、理学療法学科と作業療法学科の1年生がそれぞれ前期に履修する「解剖学Ⅲ」です。双方の資格で共通する基礎知識となる、人体に約400ある筋肉の動きと役割を学ぶ科目で、理学療法士の私と作業療法士の石丸先生とで、共通する基礎知識を洗い出し、授業構成を考え、教材も作成しています。

石丸 講師によって教え方に違いがあると学生が混乱するので、2年目の私が松原先生の指導法に合わせるようにしています。

松原 私は数年前からこの科目を受け持っていて、学生が興味を持つポイントやつまづきやすいポイントをつかんでいるので、それを石丸先生と共有しながら授業づくりをしています。評価は筆記と実技の2種類の試験で行い、採点基準は2人で話し合いながら決めています。

石丸 この科目で学ぶのは1年生後期以降の学習につながる基礎知識なのでしっかり覚えなければなりませんのですが、その数がとにかく多いので学生も学習意欲が途切れがちです。そこで、人体骨格模型を使って筋肉の動きをイメージしやすいようにしたり、覚えられそうな範囲を小テストにして達成感を味わえるようにしたりと、学習が毎日継続するように工夫しています。

——担当者が2人いると相談しやすいと思いますが、ほかの科目ではどうですか。

川崎 2人体制の授業はこの科目のみで、私は担当の2科目とも1人で教え

ています。指導の相談は前任者や先輩の先生方にしています。前職では、教えるといっても後輩への指導なので、相手は基本的な知識・技能を身につけている状態です。これから理学療法士の技能を学ぼうという学生とは大きく異なり、指導の仕方を変える必要があります。日々、試行錯誤をしながら、どのように言えば伝わるのかを考えています。

松原 どの講師が担当となっても指導の質を維持できるようにするために、コマシラバスの作成に着手しています。これは、科目ごとに1回の授業について分単位で指導の流れを示そうというものです。ただ、詳細に記述しようとするほど、当然、作成に時間がかかるので、先生方の業務量などを把握しながら、コマシラバスのフォーマットを改訂する必要があると感じています。

——先生間の指導内容のすり合わせなどは、どのようにされていますか。

松原 年間カリキュラムが決まった段階で、科目間で指導分野のすり合わせをしています。最終的にどこまで指導するかは、講師の裁量にまかされる部分が多くあります。だからこそ、コマシラバスを作成し、扱う知識・技能が重複していないか、どの深さまで指導するか、その続きはどの科目で扱うのかといったことを確認、共有し合うことに意味があると思います。ただ、指導の仕方そのものは、講師の裁量に任せ、各自の個性を活かして授業をした方がよいと考えています。

調査結果

まず「基礎力リサーチ」の2時点(5月・12月)の結果を活用し、高校時代からの学びに対する態度、授業満足度、職業準備意識について特に変化が見られた学生8人を抽出した。下表は、各学生のポイント変化を整理したものである。

高校時代と比べて学習意欲が高まった学生7人の結果を見ると、(学生Bは他学生と比べ、著しい学習意欲の低下が確認されたため抽出)、学習時間については、約半数の学生が増加、残りの半数は維持、あるいは低下していた。同様に、職業接近に関する項目を見ると、多くの学生が、入学後の1年間で職業に対する関心を高めていた。表1の数値は、あくまで2時点の変化量であり、変化量「0」の学生が悩みや迷いを抱えていないということを意味

するものではない(「将来の職業について、いったん決めしたが、まだ迷いがある」の質問について5月調査、12月調査とも「とてもあてはまる」と回答した場合、変化量は「0」になる)。実際、回答の元データに立ち戻ると、進路について何らかの悩みや迷いを抱えながら、1年目の学生生活を過ごしていた学生は多い。

専門学校には、一般的に、入学時点で将来の職業を決めた学生が進学していると思われやすいが、実際には、将来、目指す職業について「覚悟」が定まらないまま入学する学生も一定数存在している。そうした学生たちは、何を「きっかけ」に意識や態度を変容させているのか。今回、その詳細を把握するために聞き取り調査を行った。その結果のポイントをP.5にまとめた。

■「基礎力リサーチ」の結果 (「学習・職業基礎意識」の回答における2時点のポイント差)

		対象者	学生 A	学生 B	学生 C	学生 D	学生 E	学生 F	学生 G	学生 H
		入試決定時期	⑦ その他	④ 高3の 1学期	③ 高1	⑤ 高3 夏中	① 高校 入学前	③ 高2	① 高校 入学前	⑦ その他
2回目(12月)のみ	態度 変容 高校からの	【逆転】 高校の時より学習意欲がわいた 4「とてもあてはまる」 3「まああてはまる」 2「あまりあてはまらない」 1「まったくあてはまらない」	4	1	3	4	4	4	4	3
		2回目(12月)～1回目(5月)の意識変化	学習習慣	1 学校の授業以外の1日の平均学習時間/ +は時間増加 -は時間減少	-1	-1	0	1	-1	0
2回目(12月)～1回目(5月)の意識変化	満足度 授業	2 希望職業実現に向けた(例、資格取得のため) 1日の平均学習時間/ +は時間増加 -は時間減少	1	-1	-1	2	0	1	1	1
		5 学校での授業に満足している/ +は満足度向上 -は満足度低下	0	-1	0	2	2	1	-1	1
	職業 接近	3 【逆転】将来の職業について今はあまり関心 がない/ +は関心が上昇 -は関心が低下	0	1	2	3	0	3	0	0
		4 将来の職業については、いったん決めだが まだ迷いがある/ +は悩み増加 -は迷い減少	1	1	-1	-3	0	-1	0	0
	生活 習慣	6 生活のリズムがうまく保てるか不安を感じて いる/ +は不安増加 -は不安減少	2	-2	-1	-1	-1	0	0	0
	やり 展 望 ・ 力	9 これからの人生に自分なりの見通しを持って いる/ +は上記の意識向上 -は上記の意識低下	0	-3	2	-2	0	0	3	1
		10 目に見える成果が期待できなくても、全力で 取り組むようにしている/ +は上記の意識向上 -は上記の意識低下	0	-1	0	-1	0	-2	1	-1
	自己 肯 定 感 ・ レ ジ リ エ ン ス	7 自分は社会や人の役に立たない人間だ/ +は自己効力感向上 -は自己効力感低下	0	1	0	1	1	0	0	0
		8 これまでの人生で真剣に打ち込んだり、困 難を乗り越えた経験を、今の自分の糧にして いる/ +は上記の意識向上 -は上記の意識低下	2	-1	3	0	0	0	1	-1

注1) 黄色をつけたマスは、2回目の調査でプラスに転じた項目。

注2) 基礎力確認テスト(生物系、物理化学系、計算系、日本語・コミュニケーション系)の結果は省略。

■聞き取り調査の結果（注目した回答を抜粋）

■質問項目（【 】内は「基礎力サーチ」に対応する項目）

- ①入学理由、入学前後のイメージ変化、高校時代の学びとの違い【高校から専門学校にかけての学習意欲の変化】
- ②専門学校での学び（授業、先生とのかかわり、学習時間）【学習習慣、授業満足度】
- ③1年間を終えて職業に対する意識の変化【職業接近】
- ④学生生活全般について（友人関係、アルバイト、家族等とのかかわり）【生活習慣】
- ⑤自身が感じる初年度（1年目）の「成長」、現在の課題や悩み。自身が考える克服方法、次年度以降の見通し【自己肯定感・レジリエンス、将来展望・やり抜く力】

■特に変容が見られた項目と内容

◎入学前後のイメージ変化（学生が入学後に直面した課題）

- オリエンテーションでは車いすの練習などを体験したが、1年生は思っていたより座学が多い。
- 学習範囲が広い（解剖学実習。理学療法士になるためにそこまで学ぶのかという驚き）。
- 学習内容が難しい（一つひとつの専門用語の意味を理解するのが難しく、量も多い）。
- 社会人経験のある学生との壁がない（社会人経験者から学べることが多く、年齢は違うが仲間として接してくれる）。

◎高校から専門学校にかけて学習意欲が向上（態度変容）した要因

1) 実践的な授業スタイル

- 座学だけでは理解できていないことも、触診の授業で、実際に筋肉の動かし方を見ながら覚えることができるので分かりやすい。
- クラスメイトと筋肉を動かし合いながら、先生が筋肉や骨の動きや働きについて丁寧に教えてくれる。入学当初、骨の名前は頭蓋骨しか知らなかったが、少しずつ体の仕組みを理解できるようになった。

2) 「国家資格取得」という目標の明確化

- 高校までの勉強はどう将来に役立つのかが分からなかったが、今学んでいることは将来の仕事につながるので、真剣に取り組んでいる。
- 他学年を交えた国家試験対策の共通模試があり、上位者の結果を貼り出される。「上には上がいる」と思えて、やる気が出る。

3) 同じ職業を目指す仲間が存在

- 放課後に学校に残って授業で分からなかったところを教え合っている。一緒に頑張っていきたいと思える仲間の存在は大きい。

4) 手厚い指導体制

- 先生たちは厳しいことも言ってくれる。いらっとする時もあるが、私たちが居残り学習をしていると、先生たちは自分の時間を割いてとても親身に教えてくれる。
- 授業の担当者ではない先生でも、自分が分からないところを一緒に考え、教えてくれる。

5) 仕事の「リアル」や仕事の広がりを知ることができる

- 先生方から臨床の実践者としての経験を聞くことで、仕事の広がりを感じることができた（障害者スポーツとのかかわり、刑務所内で生活する方の支援など）。
- 同じ作業療法でも、かかわる領域（精神、身体、発達）によって仕事内容が異なると知り、自分に合う仕事、合わない仕事があらず見えてきて、モチベーションが上がった。

◎学生が感じている成長

1) 「職業に就く」ことに対する覚悟を持てた

- 初めは、試験の出題範囲を覚えてもらい、試験結果がよければ、それでよく、試験が終わるとあまり勉強していなかった。しかし、国家試験では試験範囲を覚えてくれるわけではなく、試験でよい点を取っても、仕事で使える知識や技術でなければ意味がない。そういう意識から、今は自分で何度も学び直そうと思うようになった。

2) 専門にかかわる知識が増え、スキルが向上した

- 友人から「筋肉痛になった」と言われた時に、「そこは〇〇で、たぶんこういう状態になっている」と説明できる自分に気づいた。少し成長していると思えた。
- 医療に関するテレビ番組を見ていた時、以前よりも内容を理解できるようになっている自分に気づいた。
- 言葉では分かっていたが、実際に実習を行い、初めて「患者様との距離感」の大切さに気づけた（下図参照）。



3) 自身の課題や苦手を克服した

- 本校入学までは数式等を使った課題が多く、何かを覚えるということをしたことがほとんどなかったため、前期は暗記系の科目で苦戦した。その反省を踏まえ、後期では、友人に教えながら自身の理解を深めるという方法に変えたことで、成果が得られた。この一連のプロセスを通じて自信が深まった。
- 自分は人見知りで、近所の人にも挨拶以上のことができなかったが、実習を通じて「話を広げる」ことの大切さを感じ、少しずつ会話を広げながら話せるようになった。

◎次年度に向けた課題

- 講義や実習を通じて、職業の大変さを知れば知るほど、自分が本当に長期実習をうまくやり切れるのか、勤め上げられるのかという不安が大きくなっている。
- アルバイトと学業の両立。親に迷惑をかけたくないので、休業期間にアルバイトをしているが、時々入れ過ぎて体調が悪くなることがあった。次年度はうまくバランスを取りたい。

調査データの授業改善への活用①

授業改善の効果検証として
有効な聞き取り調査

——生活面、学習面の課題を挙げていただきましたが、今回の調査結果を教育改善に活かしていただければと考えています。まず、調査結果をご覧になり、どんな点に注目されましたか。

松原 「解剖学Ⅲ」について「分かりやすい」という学生の声が多かったのは励みになります。この科目は、元々、学生から厳しい評価を受けていた科目の1つでした。今の学生の気質に応じて授業改善をしてきたのは、正しかったのだという検証にもなりました。

——具体的にどのような点に成果を感じましたか。

松原 「解剖学Ⅲ」では、筋肉の動きと役割を学びますが、筋肉は全身で約400あり、左右対称でその半分だとしても約200の筋肉についてどの骨からどの骨までつながっていて、伸縮によってどのような動きをして、何の神経が通っているのか、一つひとつ覚えなければなりません。私の学生時代には、この科目は座学で、私自身、暗記科目だと思ってただ覚えていましたが、今の学生はそれではついてきません。そこで、人体の骨格模型を使い、筋肉にみため毛糸で骨と骨をつないで、筋肉の動きを目で確認し、動きを実感できるようにしました。調査結果には「実際の動かし方を見ながら覚える方が分かりやすい」という声があり



専門学校 YIC リハビリテーション大学校では、多くの科目で、座学中心の授業から演習を取り入れた授業に転換し、学生が手を動かしながら学べるようにしている。



ましたが、それはまさに授業のねらい通りと言えます。

石丸 「筋肉の動きや働きを丁寧に教えてくれる」という声も複数ありましたが、「この毛糸を引っ張ったらどんな動きをする?」「こうすると肘が曲がるよね」など問いかけながら筋肉を立体的に認知させ、その上で自分たちの体を触って実感できるようにしたことが、理解の深まりにつながっていると思います。それに加えて、自身の職務経験を活かして、「この骨はこう折れることが多い」「この筋肉は傷つきやすく、現場でよく目にする」といった、臨床で扱うことの多い情報を併せて伝えるようにしたのがよかったと思います。

——そのような指導の工夫はどのように生まれたのですか。

松原 校外の研究会の会場に毛糸だらけの人体骨格模型が置いてあり、それにヒントを得ました。2年前から骨格模型を用いる活動を試験的に取り入れたところ、学生の理解度が深まっていたので、2017年度から全面的に取り入れました。グループワークにすることで、理解できた学生がまだできてない学生に教えるといった学び合いも起き、授業が活性化するという効果も見られています。

——学生からは「1年生は思っていたよりも座学が多い」という声もありますから、活動中心の授業に成果が得られ

たことは、授業改善の方向性のヒントになるのではないのでしょうか。

石丸 授業が高評価であることはうれしいですが、なぜ高評価なのか。今回のように、調査結果と学生のリアルな声を併せて見極める必要があると思いました。活動の目的は骨や筋肉の動きを理解することであり、それが分かりやすい授業だから「楽しい」という学生もいますが、単に毛糸をつける作業が楽しいという学生も見受けられません。活動ありきで授業を考えるのではなく、「学習内容を学生がしっかり理解できる」という観点で工夫する重要性を改めて認識しました。

松原 実は「解剖学Ⅲ」は以前1人で担当していたのですが、1クラス約40人の授業を1人で机間指導することは難しく、その後の学習を左右する基礎的な科目だと考えると2人で指導するのがよいと提案したという経緯があります。今回の「基礎力リサーチ」と聞き取り調査を組み合わせた結果は、現在の指導体制の有効性を立証したり、見直したりする材料になり、授業改善の効果を評価する方法として役立つと思いました。

調査データの授業改善への活用②

指導の方向性を
確信できる場になった

——川崎先生は調査結果をどう見られ

ましたか。

川崎 「いらっとすることもありますが、親身に教えてくれる」という声がありました。まさにその通りかもしれませんが、私が担当する科目は、学習範囲が広く、筋肉の動きを理解していないと学習が進めづらいという内容です。しかも、2年次では1年次に学習した内容を深く学ぶ科目があり、さらに、3年生ではそれらの知識を前提に実習が行われます。私自身、学生時代に苦学した科目なので、知識を確実に身につけてほしいと思い、小テストは何度もしていますし、同じ間違いをしていれば何度も注意を促しています。一方で、私の講師としての経験不足が学生の不利益にならないよう、時間をかけて指導することで指導力をカバーしようと考えました。授業後に自主学習をしている学生につき合っただけで教えています。

——それが親身な先生という評価につながっているんですね。

川崎 以前臨床の現場で実習生を受け入れた際に、「なぜこれができないのか」と思ったことがあり、本学の学生が実習に行った際には「YICの学生はできる」としてもらいたいというのが根本にあります。私自身は学生に嫌がられてもよいので、国家試験合格はもちろん、その先の就職後のことを見据えて、重要なことはしつこく指導するというスタンスで学生に接しています。それが、学生に肯定的に受け止めてもらっていると分かり、安心しました。

授業が高評価であっても、
学生の声を見極めて、
学習のねらいがしっかり身につく工夫に
しなければならぬと思います。

指導改善に活かせるよう、
入学後の学力や国家試験の合格と
調査結果との相関を見ていきたいです。



調査データの授業改善への活用③

学生の声を掘り起こし、 指導改善に活かしたい

——先生方は、調査結果をどのように活用したいと思われませんか。

石丸 学生の個別面談の時に、生活スタイルや学習への意識といった情報があれば、それを念頭に学生と向き合えるメリットは大きいと思います。この調査結果には、授業で接するだけではつかみ切れていない情報がありました。項目に答えるだけのアンケートでは、ここまで詳しい情報は得られないと思います。

松原 面談では、成績が振るわない学生に、その要因に考えられるアルバイトの状況を尋ねますが、すべてを把握しているわけではありません。学校が把握しづらいことも、こうした機会があれば、きちんと状況をつかみ、相応の対応ができそうです。

石丸 最も気になるのは、国家試験の合格との相関です。入学時の学力やその後の意識がどのように関係しているのかが分かれば、指導改善に活かせると思いました。

——授業での学力と今回の調査結果と

の相関は重要ですね。

松原 「基礎力リサーチ」の「基礎力確認テスト」や入学前プログラムの成績と、本学が保有している入学後の成績とを関連づけて分析した結果を見てみたいと思いました。例えば、1年次で不合格だった科目との相関です。休学や退学をどう防ぐかが、専門学校では重要な課題であり、意識調査で、そういった学生を抽出できるような項目があれば、有効だと思います。

石丸 経験的には、自己を振り返って学習を進める力が低い学生において、休学や退学の比率が高いと感じています。そうしたことが、経験的にではなく、客観的なデータの裏づけに基づき、学習を支援できればいいと考えます。

——授業改善にはどのように活用できそうでしょうか。

石丸 現在も学校全体で授業評価を実施していますが、評価項目に○印をつけるもので、自由記述の回答は任意であり、詳細な評価まで把握しきれていません。調査データと聞き取り調査の結果を組み合わせることで、学生の姿を捉えることで、指導にも活かせると思います。

松原 講師ときちんとコミュニケーションを取れている学生はよいですが、不満に思うことを表に出さない学生もいます。全員でなくても、今回のように、調査から変化の見られた学生を抽出し、聞き取り調査を行うことで、埋もれていた学生の声を掘り起こすことができそうです。肯定的に捉えた学生と否定的に捉えた学生の双方から意見を聞けると、指導改善に活かす情報が得られると思いました。

